

博士論文の要約

氏名：中村 真里絵

論文題目：タイ東北部における土器づくりと職人をめぐる人類学的研究——土器生産地ダーン・クウィアンの形成

本論文は、タイ王国東北部のナコンラーチャシーマー県（通称コラート）、チョクチャイ郡の農村地域に位置する、東北部随一の土器生産地ダーン・クウィアンと土器づくりに関わる職人たちの民族誌である。

コラート市街地から南へ幹線道路を約 15km 下ると、道沿いには土器販売店が立ち並ぶ。そこからさらに 2km 南へ下り、細い道を入っていくと家屋や工房、窯がひしめき土器をつくっている村落がある。この販売店が立ち並ぶ一帯から村落を含めて「ダーン・クウィアン」と呼ばれている。ダーン・クウィアンとは行政区の名前でもあるが、タイ人の間で土器産地として知られている産地の名称でもある。この産地のなかでも家族をベースに土器づくりに従事している世帯が多い C 村を主な調査対象地とした。

本論文の目的は、周辺地域の土器づくりが衰退するなか、このダーン・クウィアンがいかにかに土器生産地として形成したのか、そして現在、村人がどのように土器づくりを営んでいるのかを民族誌として描き出すことである。その上で、タイ農村におけるものづくりのあり方を明らかにし、これまで、農業を中心に描かれてきたタイ東北部の民族誌研究において、非農業に着目した民族誌として新たな視角を提出することを目指した。

本論文の主なデータは 2005 年 10 月から 2006 年 8 月までの住み込みをしながらの、インタビュー調査および参与観察によって得られたものである。この本調査終了後も断続的に補足調査を実施してきた。

本論文の第 3 章から第 7 章までは、時間軸に沿って二部の構成をとった。ダーン・クウィアンの土器づくりが副業から専業へと移行する転換期を、1970 年代後半から 1980 年代前半と捉えた。第 1 部「副業から専業へ」は、副業時代から現在にいたるまでを扱う第 3 章と第 4 章とし、第 2 部「ダーン・クウィアンの土器づくりの現在」は、専業化以後の土器づくりを扱う第 5 章、第 6 章、第 7 章とした。

第 1 章「序論」では先行研究を検討し、本論文を文化人類学のものづくり研究、タイの農村社会学の研究、そして 1980 年代以降のタイ農村の非農業を扱う民族誌研究の間に位置付けた。その上で、タイの農村研究において長らく生業であった農業の影であったものづくりに焦点を当て、タイ農村を再考することを示した。

第 2 章「調査地の概要」では、東北部が国家形成期以降、経済的・政治的に周縁に位置付けられてきたことを述べた。調査地が位置するコラートは、バンコクから東北部への玄関口にあたり、文化的には中部と東北部をつなぐ緩衝地帯であった。東北部では 1960 年代以降、バンコク都市部への出稼ぎのため多くの若者が流出し、農村の弱体化が指摘されてきた一方で、調査村落は土器づくりを介して人々が活発に行き来し、生活空間であると同時に経済活動の空間であることを示した。

第1部「副業から専業へ」では、まず3章「副業時代の土器づくり」において、かつて土器づくりはムーン川近くの低地の農耕地でシロアリのアリ塚、森林、川という自然資源に密接に結びついておこなわれていたこと、農閑期の副業だったことを述べた。男性たちは、牛車を活用した長距離移動の慣習によって、行く先々で稲作の収穫量の不足分や生活必需品を補うために、水甕や貯蔵用の甕、料理用鉢などの土器を物々交換していた。この移動と物々交換により、土器は地域一帯に流通していたが、こうした移動は1970年代には終焉に向かっていった。一方、1960年代に入り土地開拓がすすみ、土地の所有意識が高まると他人の土地にあるアリ塚を焼成窯として使用することに心理的葛藤が生まれるようになった。そうした頃に、美術教師によるレンガ窯の技術が導入され、微高地である村落内部へと土器づくりの場所が移動した。その結果、洪水に影響を受けずに通年の土器づくりが可能になった。

第4章「日用品から装飾品へ」では、1970年代から80年代にかけて、日用品から装飾品へとつくる土器を転換させることにより、ダーン・クウィアンが土器づくりの生産地として発展したことを述べた。これは、1970年代の民主化運動にかかわった学生運動家たちが、政府の弾圧を逃れて「森へ入る」時に、ダーン・クウィアンにも立ち寄り、土器に模様付けをもたらしたことによる。装飾された土器は付加価値が付き高値で売れるようになった。その後、誕生したビーズのネックレスは、ロックバンドや映画スターが着用したことにより若者の間で流行した。また、タイの音楽ジャンル「生きるための歌」のロックバンド、カラバオが「ダーン・クウィアン」の歌をリリースしたことで、ダーン・クウィアンはタイの人々の間に「土器生産地」として知れわたるようになった。装飾品への土器と生まれ変わったことにより、土器の需要は高まり、村人たちは農業をやめ、土器づくりを生業とすることになった。

以上の第1部「副業から専業へ」では、農耕地で営まれていた土器づくりが村落内部に移動し、農業に替わる新たな生業となったことを明らかにした。それは、地方の一農村が中央の政治に接合していく過程でもあった。続く第2部「ダーン・クウィアンの土器づくりの現在」では、土器づくりの空間が農耕地から村落内部へと移転した時、土器づくりが村落においてどのように再配置されているのか、また社会関係がどのように再編されているのかを論じた。具体的には、人びとが屋敷地という親族固有の領域で、どのような社会関係のもとで土器をつくっているのかを、製作工程、社会関係、屋敷地という三つの要素から捉えて分析した。

第5章「現在のダーン・クウィアンにおける土器生産」では、まずダーン・クウィアンでつくられる土器が多様性に富んでいることを示した。日用品から装飾品となった土器は、室内外の装飾用として、表面に模様を施した植木鉢や壺、複数のパーツをつなげてつくる噴水から、フクロウやネコ、魚、タイの子どもの人形など造形的なものまで多様化していった。それらの中には彩色を施されるものもあった。装飾品となったダーン・クウィアンの土器はタイ全土へ、さらには海外へと流通するようになった。

続いて、製作工程に着目し、土器づくりが集落に取り込まれ生産体制が再編された際に、原料の獲得からの各工程、そして販売、流通にいたるまでが細分化され、分業化されたこと、作業の一部が機械化されたことを明らかにした。この土器をつくるという作業を通じて、人々は夫婦や工房内のみではなく、工房外の人ともつながりを持つことになった。作

られる土器は多様化したものの、都市の販売店との受注関係で結ばれた工房は流行に応じて同じものを大量につくることになった。

第6章「屋敷地における土器づくり」では、これまで村落外で営まれた土器づくりが村落内部に再配置され、屋敷地にて夫婦、親族、隣人関係という近しい関係に基づいて営まれてきたことを明らかにした。この章では、タイ東北部の家族と生業にみられる特徴として水野浩一が提示した「屋敷地共住集団」の概念を手掛かりに、C村の3つの親族を取り上げて、屋敷地の構成と親族関係、土器づくりの社会関係を分析した。それにより、屋敷地では、子どもたちは結婚すると家屋と工房を独立したのち、窯も独立するという、居住と生業が密接に結びついた生活を送っていることを明らかにした。これは、土器づくりが、農業が生業であった時代の屋敷地共住集団の延長線上に営まれていたことを示している。しかし、世代が下ることにより人々の紐帯は弱まり、屋敷地は分割され、それぞれの世帯の独立性が高まる傾向にあった。同時に、屋敷地が家屋、工房、窯で飽和状態になると家屋や工房、窯の全てを独立していくことは物理的な限界を迎えることになる。これらを検討すると、C村の屋敷地を基盤とした土器づくりは新たな段階を迎えつつあるといえるが、これは、水野が指摘した屋敷地共住集団の持つ周期性の特徴とも重なるものでもあった。

第7章「成形技法からみる社会の変化」では、土器づくりが活性化するダーン・クウィアンの工房において、成形技法が複数化していることに着目し、その変遷を社会変化から読み解いた。ダーン・クウィアンでは、1990年代以降に外部から異なる技法を習得した成形職人が流入することにより、成形技法が複数化したことを明らかにした。第7章では、村人たちの説明に従って、回転台での紐づくりを「在来の技法」、電動ロクロでの水挽きを「外来の技法」に大別して分析した。

C村にやってきた職人たちの多くはシーサケット県の特定の村からやってきていた。彼らは土地がないため工房主になることはない。雇われの出稼ぎ職人として村に居住し、収入の条件がよければ別の生産地へ移動する、雇用関係のみで結びついた存在であった。彼らの技法は小さい土器をつくるのに適していたため、大きい土器をつくるのが得意な在来の技法と棲み分けられ、村における彼らの存在感は高まっている。現在では在来の職人の中にも外来の技法を習得し、つくる物によって使い分けている者もみられる。こうした状況は、ものづくりとその担い手の技術の柔軟な関係を示している。

なお、この第7章で論じた複数の成形技法が併存する様相を捉えた映像作品「東北タイの土器生産地にみられる成形技法」(21分)を本論文に添付して提出した。

第8章「結論」では、以上の議論をまとめて結論と課題を示した。ダーン・クウィアンの土器づくりは、かつては地域内で展開していたが、1960年代以降に土地開拓を含め、中央と地方の結び付きが強まってから変化していくこととなった。特に生産地への転換をもたらしたのは1970年代の民主化運動の学生が村にやってきたこと、外部の知識人によるレンガ窯の技術の流入といった、外部者との結びつきが欠かせなかった。

また土器生産地は、周辺村落の若者による出稼ぎ労働の増加や、換金作物栽培への転換する時期に形成していることから、村の人々にとって土器づくりに従事することは、工場労働や換金作物栽培に代わる生活の糧を得る手段であったことがわかる。村落内部に目を転じてみると、土器づくりは農業を支える居住形態であった屋敷地共住集団の延長線上に営まれていた。しかし、それは相続可能な土地の余剰に依存しているため、世代が下ると

物理的限界を迎える。現在では、かつてのように土地が不足すると新たな土地を開拓する移動はないため、足りない土地は補充されることはなく新たな屋敷地共住集団をつくることはできない。土器づくりと土地と親族との密接なつながりがなくなりつつある現在、外部の職人を受け入れるケースも多くなっている。外部の職人は、新たな技法とともに村へと流入し、土器づくりは活発化してきた。タイの土器づくりは、日本の窯元のように親から子へと代々タテに継承していくものではなく、常に外部からの学生や知識人、そして現在では出稼ぎ職人を受け入れ、技術の変化も受け入れながら柔軟なものづくりをおこなってきたといえる。